

ムーミン

——ただ生きることのアナキズム

渡辺ミルバ（小説家）&渡辺一樹（倫理学研究）

はじめてムーミンを読めば、きっと驚くと思う。そこにあるのは、子供騙しのモラル劇ではなく、たのしいアナキズムの表現である。本稿は、ムーミンからオルタナティブな生き方を学ぶ試みである。本稿はまた、ムーミンをそのまま読むものであって、作者のトーベ・ヤンソンの人となりから読むことをしない。トールベそのひとは魅力的だが、彼女については別稿に譲る。

ただ生きること

「ヨクサルのほうが、案外いろいろと気をつかっているのかもしれないよ。おちつきはらって、てきとうにね。——ヨクサルは、ただ生きようとしているんだ」（『ムーミンババの思い出』）

ひとはたいてい、何かのために生きています。お金を得るため、正義を実現するため、選挙に勝つため。ひらがえってムーミンたちは、もがきつつも、ただ生きようとする。それはふつうのひとからみれば異様なことであり、警察権力には警戒されることだ。

ムーミンのアナキズムは、この「ただ生きる」ということにあると思う。では、「ただ生きる」とはどのようなものか。

まずは、仲間と生きることが大事

だ。ムーミン谷とはコミュニティのことである。訳のわからない連中が、入れ替わりつつ、寄り集まる。ひとりでは、「ただ生きる」ことはできないし、世間に吞まれて暮らしていると「ただ生きる」ことをさせてもらえない。

「わたしははじめての友だちを得たのでした。つまり、わたしの人生が、ほんとうの意味で始まったのです」（『ムーミンババの思い出』）

ムーミンの仲間たちは基本的に、バラバラに住む。ゆるやかに固定されたメンバーがいるだけで、それは絶えず変動する。そのくらいのゆるさがちょうど良さそうだ。ムーミンたちは来客を基本的に受け入れ、もてなす。そうやって仲間が増え、新たなプロジェクトが広がる。だから、「全員を受け入れるべき」とはならない。「パンケーキを食べるやつに悪い奴はいない」など、コミュニティ独自の基準は作っておいたほうが良い。

次に、目的のない冒険が大事だ。「ただ生きる」ことは日常生活の繰

り返しではない。ムーミンたちも、メンバーそれぞれの思いつきのプロジェクトを試す。山や海に行く。訳のわからない理由で宴会を開く。演劇をする。警察をビビらせ、その看板を燃やす。ムーミンにおいてこれらは「冒険」と呼ばれる。冒険をすることで、新たな仲間と出会い、日常生活が新たに組織され直される。冒険を経て、ふだんの生活が問い直され、また新たなプロジェクトへと開かれていく。

日常、冒険、新たな日常、新たな冒険。「ただ生きる」とは、この繰り返しによって、不断にたのしい生活をするということだ。

冒険をつうじた偶然の出会いについても、ムーミンはヒントをくれる。ムーミンたちは、何も考えずに入った家で、義務に囚われた生活を送るフィリフオンカと宴会を開くのだが、いつの間にか彼女と一緒に警察の看板を燃やすことになる（八頁参照。その後、逮捕される）。実験的な生活の新鮮さは、身体的に響くものだ。

その新鮮さは、ただ楽しく話すだけでひとを変えてしまう。たのしいコミュニティの人間が外に出て交わることで何かが起き、またたのしいコミュニティが強化されていく。この交わりは、党派的・論理的なオルグ・教化ではない。目的なき、身体的な交流、これが大事だ。仲間作りや蜂起というものはつねに、ともに楽しく踊ることから始まる。

持つことではなく見ること

「ぼくは、見るだけにしてるんだ。そして、立ち去るときには、それを頭の中へしまっておくのだ。ぼくはそれで、かばんをもち歩くよりも、ずっとたのしいね」（『ムーミン谷の彗星』）

ただ生きるということとは、所有（持つこと）ではなく、知覚（見ること）を重視することでもある。何かを所有しようとする、どうしても権力と支配が生まれてしまう。持てる者と持たざる者の区別、持てる者への服従、失うことへの恐れ。仲間と一緒に時だつて、何かを持つとすると、同じことが起きる。だからスナフキンやムーミンは、「知覚の共有」を重視する。仲間とともに何かを見るとき、そこに支配はない。一緒にあげた炎を見るとき、支配関係を乗り越えた絆が生まれる。

知覚を共有することは、また、おかしな仲間をつくり出すことでもある。ムーミンたちと警察の立て札を燃やし、その炎をともにみたフィリフオンカは歌う。「おじさんなんか、もういらんない！ おばさんなんか、もういらんない！ ビビデーバビデーブー」（『ムーミン谷の夏まつり』）

スナフキンの焚火を見ながら新たな名前を得たティーティウーは叫ぶ。「ぼくは、ありったけ生きるのをいそがなくちゃならないんです。もうずいぶん時間をむだにしちまつたもんでね」（『ムーミン谷の仲間た

ち）親の呪いによって姿が見えなくなったニンニは、怒りや楽しみといった知覚を仲間と共有するなかで、新しい姿を得る。

われらが仲間たちの楽しさを見せ、その知覚を共有することで、うねりは大きくなっていく（劇場でのムーミンたちと警察との大乱闘をみた観客たちのように）。つまり、アナキーをつくることは、何かを所有することではなく（むろん権力や議会を所有することではなく）、ともになにかを見てしまうことなのではないか。

君に会うために生きてきた

「初恋と最後の恋のちがいを、ご存じ？ 初恋はこれが最後の恋だ」と思うし、最後の恋はこれこそ初恋だと思うものなの」（『恋するムーミン』）

ムーミンの物語は、偶然の出会いによる救済という主題によって貫かれている。とくに目的もなく始まったはずの物語が、偶然そのひとに出会ってしまったことで、はじめからそこに向かっていたかのように救いの結末へとつくりなおされる。ただ生きることは、そういうことなのだろう。

この友と、このひとと、たまたま出会ってしまったことで、人生は、まるで最初からそのためにあったかのようにつくりかえられてしまう。偶然から必然が生まれてくる。私の人生は、君に出会うためにあった。